



Title	翻刻『万代大雑書古今大成』（七）
Author(s)	伊藤, 孝行
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 70, 1(右)-12
Issue Date	2017-03-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/64715">http://hdl.handle.net/2115/64715</a>
Type	bulletin (article)
Note	2017年11月29日、本稿の要旨が訂正されました。訂正された要旨は、summary(revised version)のPDFをご確認ください。; On November 29, 2017, the summary of this paper was corrected. Please check "summary (revised version)" PDF for the corrected summary.
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	MC70-4_Ito.pdf



[Instructions for use](#)

## 翻刻『万代大雑書古今大成』（七）

伊 藤 孝 行

### 《要 旨》

本稿では、『万代大雑書古今大成』（読み…ばんだいおおざっしょこんたいせい）の書誌および翻刻の一部を掲げる。『万代大雑書古今大成』は天保年間に発行され、明治に入り改訂版が発行された、生活するうえで必要なことが記してある便覧である。それゆえ、古くから伝わる習慣から占星術、名付けの際の留意点等々、多岐にわたる内容となっている。

『万代大雑書古今大成』は版本であるが、管見のかぎり今のところ翻刻されていない。近代日本語資料の一として、また近代に於ける日本の習慣や風俗についての資料として、一定の価値はあろう。本稿では伊藤（二〇一五）<sup>1)</sup>に続き、「な三」より「な七」まで掲げる。

### 《SUMMARY》

Modern Japanese, Reprinting, Bandai Ozassyo Kokon Taisei

Reprinting: “Bandai Ozassyo Kokon Taisei” (7)

Takayuki Iro

This paper presents a part of the book entitled “Bandai Ozassyo Kokon Taisei”, which was first issued in the Tenpo Period (1837-1858), rewritten in present-day Japanese [characters]. It is a guide book describing the particulars of daily life at the time. It ranges

widely over many themes, from traditional customs and astrology, to the points to note in naming children. Although “Bandai Ozassyo Kokon Taisei” is a printed book, and has had a revised edition issued in the Meiji period, it has not been translated into modern characters before, to the author’s knowledge. As one of the sources of modern Japanese and also as a material describing Japanese manners and customs of the past, it is of indisputable value. An abstract from the book, together with the title, colophon and preface, are reproduced here.

**【凡例】**

- ・漢字の表記は、通行の字体に改めた。
- ・割注はへくで示した。割注中の改行箇所は／で示した。
- ・●は翻刻しかねた箇所である。今後の課題としたい。

な三 長雨降出しをしる歌

つち五郎 天一太郎 寒四郎

八専次郎 土用三郎

右の歌ハつちに入て五日めよりふれば永

し天一天上の日ふるも永し寒に入

て四日め八専の二日め土用の三日め

にふれば何れも永しと知べし

な四 男女昼夜の占

昼生る、子ハ父に類し夜生る、

子ハ母に類すこれ陰陽の利也

と孫真人の説也

な五 名乗字つくし

木性 辰明 与具 福

俊敏 比陸 緒枚 方

片義 富品 番繁 族

毎敷 伯全 須白 孚

清満 弥並 美本 末

妙 火性 家候 刻言 遐

流紀 祀近 畿局 起

計孤 形堅 兼金 懷

廉香 寄階 吉義 賢

慶嘉 敬熹 可宜 喜

高教 敬紀 堯公 均

唯建 経能 矩概 業

雅庫 慶休 雅諧 儀

規康 泰教 季堪 元

匡祇 柯光 敬公 言

現起 厚顕 古盈 身

觀見 根隅 介紀 巷

土性 待貳 亮督 閭

里覽 林重 定條 貞

朗朶 治勅 著宅 倫

首致 朝榜 量置 知

通呢 代卓 中仲 ●

連侶 利致 良理 德

珍歴 登脩 棟智 遼

等隆 令督 縁稜 隣

類頭 延陟 董度 典

内為 但当 都掠 忠

陣展 徳納 寧綱 卓

明篤 敦来 仁両 住

金性 雅尹 応和 順  
 邑威 有盈 惟伊 葉  
 維益 又也 俟宣 黃  
 芸往 遊由 溢光 英  
 旧許 角祐 右孝 好  
 喬唯 格堪 行貫 胤  
 懷庸 為也 永猶 号  
 雨延 刑憲 邑郡 阿  
 隈熊 安易 逸穩 屋  
 玄遙 遠久 云泰 寬  
 以用 廻永 懸俱 共  
 禪尋 愛興 男運 員  
 等固 克易 倚依 因  
 悅榮 由賀 幸  
 水性 成將 昌方 定  
 自淳 詮秋 章此 是  
 之斯 枝照 增倍 房  
 総君 樹木 躬視 美  
 茂芝 順松 族在 相  
 郷真 実清 浄雪 静  
 舍晴 時説 節晨 十  
 伴友 豊富 稔歳 親

庶問 少巨 尾数 般  
 筭像 姿象 質勝 包  
 周門 哉首 上正 頼  
 仍自 資從 善祥 世  
 俗社 尊貴 直政 正  
 只武 胤種 任列 次  
 紹序 恒常 成作 直  
 尚字 宗旨 村宇 氏  
 姓倍 伸

な六 男女相生に付悪き年

きのえとら ミづのえね かのえさる

右のとしの女ハ男をころす

ひのえむま つちのえね ミづのととり

右の年の男ハ女をころす

されバ始夫婦の契約をなす

ときよくく年を聞合す

べし此としの事を知ずして

夫婦になれバかならず病難など

たへぬものなり

な七 男女相生善悪

男女相生の事相生相尅二よつて

一代の貧福善悪子孫繁昌迄  
も極る事なれば夫妻の契約

ハ尤大事なる事よく／＼相生  
を考へて約束あるべき也しかし

相生相生したるゆゑ心得悪く邪念  
無慈悲なれば相生の中も相尅と  
なりてあしき事有らましを

左に挙て大概をしらしむ

男木女木同気相もとめ木に

木をならべて林となるこの理を

もつてよしといへども木に木

枝を枯らす理にて不信心なれ

バ常々くぜつ病事たへず産

子ハ死するか又兩人ありといへ

共不孝なるべし常に三宝荒

神をいのりてよし

歌二

千早振かミも哀と

思をらんいがきの

うちをたのむ我身を

男木女火順和の理にてよし

一たん氏神のとがめにてく  
ぜつ事あれども後々ハ大福

来り命長し牛馬にゑん  
ありて富貴也子ハ七人ある  
べし

歌二

いにしへのいかなる

神のむすぶにも

おもふまゝなる

末ぞ

たのしき

男木女土克するといへ共克のう

ちの相生中あしくて土より

木を生る理なし和合の理有

が故に土より木を生ず但し

男土女木なればわろし財宝

ありて牛馬多く万よし但し

思ひ事常にあり又子なし

歌二

わが世こそなみの

人にはすぐれたれ

よろづのものに

乏しからねば

男木女金はも尅のうちの

相生也其故ハ金も木を以て

自由する鑿長刀又ハ農具等

も柄あつて用を生すこれ克の

肉の相生なり但女木男金は

大にわろし子ハ二人か三人有べし

信心つよく慈悲深くしてよし

歌二

あひそめしことのは

だにもなかりせバ

君をつらしと

思はざらまし

男木女水相生したりといへども

下より上を生ずるに逆の理に

て半吉子ハ五人か三人あるべし

田畠に縁あり氏神をつね

く信心して大吉あるべし

歌二

あらたのし

ふたりが中に

くらしたて、

世をふる事ぞ

嬉し

かりける

男火女木これも小逆の理にして

半吉也子ハ一二人ありてなん

なまし財宝ありて牛馬に

ゑんあり名もたかく人にしら

るべし但不信心なれば仕合

わろく

あしかるべし

歌二

たのもしく

かくすぎなんと

おもへども

後世をねがふぞ

わびしかりける

男火女火是ハ火に火をかさねて

炎となり一身をやきうしなふ

理にて比和とハいへどもわろし

子ハあれども不孝にしてくぜ

つたへず食物とほしく万  
おもしろからず

歌二

日にならび

恋しき

ことは

いやまして

かゝる

あそびに

あふぞ

くやしき

男火女土上より下を生る順  
和の理にして大吉也命長  
く財宝多く位高し富  
貴にして子あまたあるか又  
二人あるべし

歌二

逢ぞめし

こゝろをふかく

むすひてし

君がなさけの

わすれがた

さよ

男火女金黄金ハ火に入れて気  
位をますなれば男のかげにて  
女も育克とハいへ共天けいと号し  
順の克なれば半吉也子一二人  
ありて人にしらる不信心なれば  
一族に遠く財宝なく短命也  
善根哀ミ深くハよし

歌二

いつしかとおもひ

わするゝひまもなく

もの思ふこと

わびしかりけれ

男火女水より上を克を不  
和の理にて大にわろし女男の  
威勢を消す食物とほしく  
貧にして子三人あり内一人ハ  
かたハなるべし又いのちも短  
かしといへり

歌二

もろともに



あふかこゝろは

なけれども

わがミひとつに

うまる子ハなし

男土女木下より上を克する

不和と号して大にわろし

子あまた生でもそだゝず貧

にして財宝とほしく家内

安からず但し信心つよくハ

仕合よかるべし

歌二

つちと木は

そのあるなる

中なれど

いのれバ神の

めぐミありけり

男土女火小逆と号して半吉

なり其身の善根慈悲心神仏

を信心のあるとなきとにて

身上よくもなり又悪くも

なるべし子ハ三人か五人あり

歌二

あらうれし

いとゞたのしき

わが身かな

よろづのものに

とほし

うらねば

男土女土是ハ比和と号して

わろし始ハよくとも後々

貧になるべし子ハ三人あり何事

もおもふにちがひ病事たへず

してわろし

歌二

身をくだき

むねをまゝに

こがせども

いけるかひなき

わがミ

なりけり

男土女金じゆんりと号して大

きによし財宝多く下人あま

た召つかひ田畠有て富貴なり  
子も五人あるべし信心ふかく  
ハイよゝよるべし

歌二

にしひがし

ふたりが中に

くらたて、

酒のいつミの

わくと

おもへば

男土女水天けい順和の相克  
なれば苦しからず不信心なら  
バ財宝乏しくよろづこゝろ  
のまゝならず子ハ二人あるべし  
信心つよければ後にハ仕合せ  
よかるべし

歌二

つちミづは草木の

たねと聞

つるが

いかにわれにハ

うまる子ハなき

男金女木天けいと号して順  
の克也信心よハくハ始ハよくとも  
後々大にまづしくなるなり  
子ハ一二人あれども常に病  
事たへずしてわろし天神を  
ふかくいのるべし

歌二

世の中に

住甲斐もなき

わか身かな

常にこゝろのなげき

たへねば

男金女火不和と号してわろし  
おもふ事叶はずして貧也病事  
しげく子あれ共うつけ物にて其  
身の命もみじかししかな  
がら信心つよくハよかるべし

歌二

むかしより

めぐる

夫婦に

逢

そめて

常に

おもひの

やむ事

もなし

男金女土小逆と号して半吉也

財宝下人牛馬にゑんあり命

長く子も五六人あるべし万

よし但し心邪見に信心

なくバ大にわろしとぞ

歌二

いにしへも

むすびそたてし

たうのはこ

日に日をそへて

たのし

かりけり

男金女金比和といへども余の  
比和とちがひて金に金ハしの  
ぎをけづる故中あしく始は

よくとも後ハおもふ事ちがひ

貧しくなるか家内に病事た

へぬかなるべし子ハ三人有と云

歌二

いかにせんともかゝる

さはりの

ある

中に

よきハ

少なきやまひ

なりけり

男金女水順和の理にて大に吉

財宝多く田畠を多く持て

うれひ事なく子ハ五人あり

長命にしてこゝろのまゝなる

べし

歌二

古へも今も

むかしも

このごろも

きのふも

けふも

たのしかりけり

男水女木順和と号してよし  
財宝多く子ハ三人か五人有べし  
長命にしてうれひ事なく万事  
大吉しかし邪見ならバあし  
かるべし随分信心してよし

歌二

世の中に

たのしき

人ハ多かれと

われにまされる

人ハ

あらしな

男水女火天けいと号すじゆん  
りのこく也子ハ三人あるべし  
但信心なくバ食乏しく財  
宝なくして大にわろし

歌二

よの中に

かゝる

わびしき

めを見るも

人に

しられぬ

身をぞ

うらむれ

男水女土不和と号して半吉  
なり病事しげく財宝なく  
口舌事多し子ハ四人あるべし  
つねく福の神をいのりて  
じやけんなるこゝろなくバよか  
るべし

歌二

かゝる世に

生れ来りし

かひもなく

身にハやまひの

たへずせめくる

男水女金大によし小逆と号  
して財宝多くけんぞくに縁  
あり子も多し随分信心つよ  
くハいよくよかるべし

歌二

此世にてかゝる

たのしみ

めでたきは

むかしの神の

誓ひ

なからん

男水女水比和とハいへ共水に水  
をそへ洪水となり世界たゞよ  
ひそこなふの理にて大にわろし  
子ハ五人あれ共後々に貧と  
なるべし何事も思ふこと  
ちがひてあしき也

歌二

たづねれば

なきものゆへに

くるしみて

あけくれ野辺を

かへるかなしさ

注

伊藤孝行（二〇一五）翻刻『万代大雑書古今大成』（二六）、「北海道  
大学留学生センター紀要」十九、四六―七四頁